

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## Return to the Land' : Henry Salt's rural vision and humanitarianism

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 光永, 雅明, Mitsunaga, Masaaki メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/656">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/656</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 「大地への帰還」

——ヘンリ・ソルトにおける農村志向と人道主義——

光 永 雅 明

はじめに<sup>1</sup>

環境保護主義の歴史の上でしばしば注目されるのが、19～20世紀転換期のイギリス本国である。たとえば、たびたび指摘されるように、当時はナショナル・トラストなどオープン・スペースの保護を求める任意団体の活動が盛んになった<sup>2</sup>。またこのような社会運動ともしばしば関係を持ちつつ、人間と広い意味での自然との関係を問い直す社会思想が多様な発展を見せたことにも、留意すべきであろう<sup>3</sup>。

もっとも、1970年代ごろから多用されるようになった環境保護主義 *environmentalism* という言葉が包含する意味はきわめて多様であり、したがって、その思想や運動の歴史と今日呼びうるものの内実も単純ではない。19～20世紀転換期のイギリスにおける環境保護主義も様々な思想や実践を内包しており、それらを一面的に整理することは困難である。

ただそれらの中で本稿において注目したいのは、イギリスの都市化に伴う諸現象——都市人口の増大と農村人口の減少、都市の住環境や自然環境の悪化、都市人口「退化」等——への批判や危機感から、人間と広い意味で

1 本稿は科学研究費補助金（研究課題番号：21520753）の成果の一部である。

2 ナショナル・トラストについては以下を参照のこと。Graham Murphy, *Founders of the National Trust* (London: National Trust Enterprises, 2002)（四元忠博訳『ナショナル・トラストの誕生』緑風出版、1992年）；水野祥子「世紀転換期イギリスの環境保護活動——ナショナル・トラスト創設をめぐる新たな展開」、『西洋史学』191（1998年）、184-203頁。

3 Peter Coates, *Nature: Western Attitudes since Ancient Times* (Berkeley: University of California Press, 1998), pp.155-165.

の自然との関係を問い直す思想や実践の諸潮流である。たとえば、都市の人口増加と人口稠密化が、都市生活環境の悪化をもたらし、それが帝国を支えるべき人々の身体的な「退化」をもたらしているとの懸念から、ロンドン都心部におけるオープン・スペースの整備を進めたミース伯爵の活動をそのひとつにあげることができよう<sup>4</sup>。

こうした潮流の中に数えられるのが、都市から離れた、農村もしくは田園における農業的ないし半農的な生活——以下本稿では「農村生活」と表記する——を志向する思想や実践の発展である。この意味での「農村志向」もまた大きな広がりを見せていたが<sup>5</sup>、その中で注目されるのが社会主義者たちによるものである。たとえばエドワード・カーペンターはシェフィールド近郊のミルソープに居住して半農生活を開始した<sup>6</sup>。あるいは、イギリスに亡命したピーター・クロボトキンは、イギリスの自給自足化を提唱し、またその信奉者などが、ニューカスル・アポン・タインにおいて農業共同体を実験的に設立したのである<sup>7</sup>。

この社会主義者たちによる農村志向は——さらに広く言えば、自然環境の保護に関する彼ら、彼女らの思想や実践は——、環境保護主義の歴史を考える上で見落とせない重要性を有しており、それにふさわしい関心を研究者から集めてきた。たとえば環境保護主義の歴史におけるひとつの焦点は、環境保護主義と政治的イデオロギーとの歴史的関係であり、19～20世紀転換期の

---

4 12代ミース伯爵および彼が創設した「首都公共庭園協会」については拙稿を参照のこと。光永雅明「都市住民にとっての自然——19世紀末のイギリスにおけるミース伯爵のオープン・スペース論に関する一考察」、『神戸市外国語大学研究年報』44（2007年12月）、25-129頁。

5 たとえば以下を参照のこと。Jan Marsh, *Back to the Land: The Pastoral Impulse in England, from 1880 to 1914* (London: Quarter Books, 1982)。

6 カーペンターについては以下を参照のこと。Chushichi Tsuzuki, *Edward Carpenter, 1844-1929: Prophet of Human Fellowship* (Cambridge: Cambridge University Press, 1980)（都築忠七『エドワード・カーペンター伝——人類連帯の予言者』晶文社、1985年）；Sheila Rowbotham, *Edward Carpenter: A Life of Liberty and Love* (London: Verso, 2008)。

7 Dennis Hardy, *Alternative Communities in Nineteenth Century England* (London: Longman, 1979), pp.181-183; Marsh, *Back to the Land*, pp.99-101; Matthew Thomas, *Anarchist Ideas and Counter-Cultures in Britain, 1880-1914: Revolutions in Everyday Life* (Aldershot: Ashgate, 2005), pp.112-115。

イギリスの社会主義者による環境保護への関心は、その関係を具体的に検討するひとつの手がかりとなる<sup>8</sup>。また環境保護主義がどのように国境を越えて歴史的に発展したのかという点にも近年、関心が集まっているが、その観点からも、社会主義者たちのものを含む当時のイギリスの環境保護主義は注目されている<sup>9</sup>。

本稿はこのように注目されてきている主題に関して、きわめて限定的な角度からひとつの検討を試みたい。それは、社会主義者であるとともに環境保護主義の先駆者の一人とも言われるヘンリ・スティーヴンズ・ソルト Henry Stephens Salt (1851-1939) (以下ヘンリ・ソルト) の農村志向の内実を、その思想面に絞り、若干の資料から確認し検討してみることである。

ソルトは「動物の権利」論を体系的に展開した初期の人物としてよく知られる<sup>10</sup>。しかし同時にソルトは、詳しくは後述するが、都市から農村に人口を呼び戻して農業生産力を高めるべきだという主張——本稿では「帰農論」と呼ぶ——もまた、彼が提唱する菜食主義を扱った著作の中で示していた。すなわち、ソルトの言い回しを用いれば「切望されているあの「大地への帰還」*return to the land*」(強調は原文)<sup>11</sup>をどのようにして進めてゆくかを、手短にはあるが、彼は論じていたのである。理想的な農村社会への展望を、ソルトなりに提出したと言ってもよいだろう。

本稿はまずこの主張に注目し、トマス・ロバート・マルサスの人口論に対

---

8 Coates, *Nature*, pp.145-172. またこのような研究成果のひとつとして以下がある。Peter C. Gould, *Early Green Politics: Back to Nature, Back to the Land, and Socialism in Britain, 1880-1900* (Brighton: Harvester Press, 1988).

9 カーペンター、ヘンリ・ソルトらの環境保護主義とガンディーのそれとの関係を論じる下記を参照のこと。Ramachandra Guha, *Environmentalism: A Global History* (Oxford: Oxford University Press, 2000), pp.19-24.

10 たとえば以下を参照のこと。Frederick Nash, *The Rights of Nature: A History of Environmental Ethics* (Madison Wis.: University of Wisconsin Press, 1989), pp.27-32. (岡崎洋監訳、松野弘訳『自然の権利——環境倫理の文明史』TBS プリタニカ、1993年、55-67頁)

11 Henry S. Salt, *The Logic of Vegetarianism*, 2nd ed. (London: George Bell & Sons, 1906), p.80. 'Land' は、たとえば「田園」とも訳しうるが、当時の社会主義者たちの農村志向がしばしば土地改革論を含んでいたこと等も念頭におき、「土地」に近い「大地」と訳した。人口に膾炙してゆく類似した表現は、「大地(田園)に戻れ」'Back to the Land' である。

するソルトの批判にも留意しながら、その内容を確認する（第二節）。次に本稿は、このソルトの帰農論をより十分に理解するために、ソルトのいわば中心的な思想や活動と、この帰農論との関係を検討したい。その検討を本稿は以下の順番で行う。まず本稿は、ソルトの中心的な思想として「人道主義」humanitarianism をとりあげ、その思想にもとづく様々な改革を推進するために設立された「人道主義連盟」Humanitarian League の活動を概観する（第三節）。そして、ソルトの帰農論が、この人道主義の理念ならびに「連盟」が進めた活動とのあいだにはらんでいた緊張関係ないし葛藤を指摘し、ソルトにおける農村志向の複雑さの一端を示すこととしたい（第四節）。

ソルトの思想と活動を直接の主題とする研究は、一定の蓄積を積み重ねてきた。代表的なものでは、古くにはスティーヴン・ウィンステンによるソルト伝<sup>12</sup>があり、またジョージ・ヘンドリックによる伝記<sup>13</sup>は、今なおソルト研究のひとつの到達点と言ってよいであろう。これらの研究においても、ソルトの農村志向には一定の言及がなされてきた。たとえばウィンステンは、ヘンリ・デイヴィッド・ソローに傾倒して自ら田園生活をを進める一方で、「文明」との接点を保持しつつつけたソルトの複雑さに注意を向けている<sup>15</sup>。また民衆による農村生活の推進にソルトが具体的に関与したか否かについても、多様な見方が出ている<sup>16</sup>。他方グールドは、ソルトの人道主義の一部を

---

12 Stephen Winsten, *Salt and His Circle* (London: Hutchinson, 1951).

13 George Hendrick, *Henry Salt: Humanitarian Reformer and Man of Letters* (Urbana: University of Illinois Press, 1977).

14 ソルトが組織した「人道主義連盟」については下記のモノグラフがある。Dan Weinbren, "Against All Cruelty": The Humanitarian League, 1891-1919," *History Workshop Journal*, 38 (1994), pp.86-105.

15 Winsten, *Salt and His Circle*, p.94.

16 ウィンステンは、失業者による「農場コロニー」の建設計画を検討するようソルトが「富裕な知人たちに働きかけたものの実現しなかったと述べている。Winsten, *Salt and His Circle*, p.73. またウィンステンの伝記に序文を寄せたショウは、ソルトがカーペンターと「土地コロニー」の設立を計画したものの実現に至らなかったと述べている。Bernard Shaw, "Preface," in Winsten, *Salt and His Circle*, pp.9-14, p.13. 他方ヘンドリックは、この「土地コロニー」へのソルトの関与を示す証拠は、カーペンターとの往復書簡には無いと言う。Hendrick, *Henry Salt*, p.48.

なす菜食主義は、農村改革をめざす社会主義運動と齟齬があったという短い重要な指摘を行っている。<sup>17</sup>

ただ上述した、マルサス思想批判を含むソルトの帰農論それ自体は、これまでの研究でも十分な検討がなされていないと思われる。<sup>18</sup>またグールドの指摘は重要だが短いものであり、本稿では、ソルトの菜食主義を支えた彼の基本的な思想（人道主義）により詳しく立ち入り、それとソルト自身の農村志向との緊張関係や葛藤を詳しく検討する。

ただし本稿は、紙幅の事情もあって、検討主題を十分包括的に吟味することはできない。まずソルトの農村志向は、本来であれば、ソローらから彼が引き継いだ「簡素な生活」（ないし「生活の簡素化」）の思想や実践とも密接に関連づけて論じるべきであろうが、本稿では立ち入る余裕がない。また資料面で言えば、きわめて旺盛な執筆活動を展開したソルトの資料をより網羅的に検討することにも、本稿では至っていない。それもあって、ソルトの帰農論と同時代の土地改革論との関係には立ち入っていない。近親者との関係にも視野を広げてソルトの内面的・感情的生活にわけいることも、本稿ではほとんどできなかった。したがってソルトの農村志向のより十分な再検討が、当時のイギリス社会主義者たちの農村志向や環境保護主義の歴史にいかなる光を与えるのかも、別稿とせざるをえない。

以上のような限定はあるものの、以下本稿では、ソルトの刊行物だけではなく、「人道主義連盟」の年次報告や、「連盟」内部部門の設立宣言など「連盟」側の資料も用いて、ソルトの農村志向の理解に一石を投じることとした。

---

17 ソルトが関与した「菜食主義協会」では、菜食主義が促す穀物の集約農業が農村回復につながるのと若干の議論が生まれたものの、同協会でも最も強調されたのは菜食が「〔動物への〕苦痛を伴わないこと」であり、その主張は社会主義運動への連携を強化するものではなかった、という。Gould, *Early Green Politics*, pp.45-46. なお菜食主義の農村志向への影響については下記も参照のこと。Marsh, *Back to the Land*, p.198.

18 グールドの指摘も、ソルトの著作と明示された資料の分析によるものではない。

## 第一節 ソルトの半生

まず本節では、次節以降の議論に先立ち、ソルトの半生を必要な範囲で簡単に確認しておこう。

ソルトは1851年に生まれ、イートン校からケンブリッジ大学キングズ・カレッジに進み、卒業後はイートン校に教員として戻った。しかし1884年に同校を辞し、1879年に結婚した妻キャサリン（ケイト）とともに、1885年、サリー州の村落であるティルフォード近くのコテージに移り、そこを拠点として文筆活動を進めた。ただしソルト夫妻はティルフォードに、また田園のただ中に永住したわけではない。夫妻は田園のコテージやロンドンのフラットを転々とし、その間、シェフィールドのカーペンターの近隣に七年間、居住したこともあった。

文筆活動は多くの主題を対象とするものであった。だがソルトが最も精力を傾けた主題のひとつであり、本稿にも大きく関係するのが、菜食主義である。代表的な著作のひとつ『菜食主義の訴え』<sup>20</sup>は1886年に刊行され（同書はイギリスに滞在した若きガンディーも読むことになる）、1899年には『菜食主義の論理』（改訂版は1906年）<sup>21</sup>が出版された。彼の帰農論が展開されるのは後者においてであり、これらの著作は第二節で検討する。またソルトはソローに傾倒しており、その本格的な評伝でも知られる。<sup>22</sup>

他方ソルトは、妻の兄を媒介するなどしてカーペンター、ジョージ・バーナード＝ショウら社会主義者たちとの交流を深めていった。またソルトは「新生活のフェロウシップ」およびフェビアン協会員のメンバーでもあった。

19 以下本節の記述のうち、ソルトの生涯の事実関係にかかわるところは、特に断らない限り、ヘンドリックによるソルト伝に依拠している。

20 Henry S. Salt, *A Plea for Vegetarianism, and Other Essays* (Manchester: Vegetarian Society, 1886).

21 註11の文献である。

22 Henry S. Salt, *The Life of H. D. Thoreau* (London: Richard Bentley & Son, 1890). 同書の1908年改訂草稿（未公刊）をヘンドリックらが編集・刊行したのが下記である。Henry S. Salt, *Life of Henry David Thoreau*, George Hendrick, Willene Hendrick, and Fritz Oehlschlaeger (eds.), (Urbana: University of Illinois Press, 2000). (山口晃訳『ヘンリ・ソローの暮らし』風行社、2001年)

だがフェビアン協会のボーア戦争支持に反対して、同協会は1901年に退会している。

1891年には、ソルト自らが指導する社会改良運動の組織が成立した。第三節と第四節で詳しく述べる「人道主義連盟」がそれである。1919年のその解散に至るまでソルトは「名誉書記」の地位にあり、同組織の指導に大きく関与し続けたと言ってよいだろう。「人道主義連盟」は、「いかなる感覚ある存在に対しても、直接的にあるいは間接的に苦痛を与えることは不正である」という原則に立ち、人間および動物に対する「人道主義的な」扱いを求める諸活動を展開した。

さらにソルトは、1895年に創刊された「人道主義連盟」の機関誌『ヒュ머니ティ』（1902年に『ヒュマニタリアン』に改称）の編集者、さらに1900年に創刊された月刊誌『ヒュメイン・リヴュー』の編集者も務め、これらの定期刊行物も、ソルトの旺盛な執筆活動の場となったのである。

## 第二節 帰農論

精力的に様々な社会改革運動と執筆活動を進めたソルトであったが、本節では彼の帰農論の内容から確認してゆこう。

ソルトは農業・農村問題に早くから関心を示し、衰退するイギリス農業の食料生産と自給率の低さに懸念を表明していた。たとえば1886年に刊行された『肉食主義の訴え』においてソルトは、「増加する何百万人も国民に対して十分な食料をいかにして供給するか」がイギリスにとって重要な問題だと述べている<sup>23</sup>。さらに、1899年に刊行され、1906年に改訂された『肉食主義の論理』においては、イギリスの食料自給率の低下に警鐘が鳴らされる。ソルトはイギリスの食料自給率が約5割でしかないことを「重大な国民的危険」と呼ぶ肉食主義者の著作を引用し、加えて「わが国において現在、農業が驚くほど無視されていること」に関しては、食料の三分の二を輸入に頼っ

23 Salt, *A Plea for Vegetarianism*, p.111.

ていることを示すクロボトキンの『田園，工場，仕事場』を参照せよと述べている。<sup>24</sup>

ソルトは、食料生産と自給率の低下のみを憂いているのではなかった。彼はこうも述べている。「都会は現在、田園から生命を飲み干しており、海外への移民の流れが国力をさらに枯渇させている。」<sup>25</sup>すなわち農村から都会へ、さらには海外へという人口の巨大な移動自身、ソルトは不健全で批判すべきものと見ていたと言えよう。

このような食料生産ならびに自給率の低下と、人口流出の双方を解決することに貢献するとされるのが菜食主義である。菜食主義が農業・農村問題の改善に貢献しうる、という主張は『菜食主義の訴え』においては、まだ十分には示されていない。<sup>26</sup>しかし『菜食主義の論理』では、より明瞭に、またより詳しく、菜食主義が帰農をうながし、農村を復興させるとの主張がなされている。以下同書における主張を、その主張に含まれるマルサスの人口論に対する批判を含めて、確認してゆこう。なお必要に応じて一部、『菜食主義の訴え』での議論にも触れることとしたい。

さて前述したように『菜食主義の論理』では、イギリスの農業生産と農業人口が危機的な状況にあるとの現状認識が示されている。ところで、その状況を説明し処方箋を提供する理論としてはマルサスの人口論があり、当時なお古典派政治経済学の著作などを通じ影響力を有していたと言ってよいだろう。ソルトはそのマルサスの論理に同書で、あるいは『菜食主義の訴え』において批判を加えている。菜食主義による農業・農村復興というソルトの見通しは、このマルサス批判を伴っており、以下、その点をやや立ち入って確認してから、議論を進めてゆきたい。

---

24 Salt, *The Logic of Vegetarianism*, p.81. 著作が引用されている菜食主義者は W. E. A. アクソンである。

25 Ibid., p.80.

26 菜食主義は「食の質素さと簡素さを実践すること」を通じて人々を「真に幸福」にするから、あらゆる食料問題の改革はそれなしには成功しない、という主張があるのみである。Salt, *A Plea for Vegetarianism*, p.114.

まず『菜食主義の訴え』でソルトは、食料不足を解決する方法として「家族の人数に一定の制限をかける」という提案を「マルサス主義者」たちが行っていると指摘する。しかしソルトによれば、そのような提案は「国民の良識が自然に、また直感的に拒否している」<sup>27</sup>。さらに同書では、「下層階級の不幸な状態」は、「生存資料 means of subsistence の何らかの現実的な欠乏ではなく、富の分配を取り扱う法の不平等」ゆえに生じていると論じ、<sup>28</sup>「生存資料」はいかなる意味においても欠乏しておらず、むしろその「分配」が問題であると指摘している。この議論はマルサスを名指しはしていない。しかし、人口に比して「生存資料」が不足しているがゆえに窮乏が生じる、というのがマルサスの著名な人口法則の表現であったこと<sup>29</sup>、またそのマルサスの議論が、たとえばジョン・ステュアート・ミルによっても引き継がれ良く知られていたことを考えると、この表現もマルサス批判を含意していたと言ってよいであろう。

次に『菜食主義の論理』に目を転じよう。ここでも「この人口過剰の恐れと海外移民の計画からなるマルサス的な時代」という表現があり、<sup>31</sup>マルサス的な人口過剰論が広がり、それにも促されて移民計画が進められている現状にソルトが留意していることが示される。そして「マルサス的な時代」にも「ひとつの解決策」があると論じ、地球の潜在的な土地生産力はきわめて高いという主張を展開してゆくのである。ここでソルトは、現在の地球では人が居住している面積は「四分の一」に満たず、さらにその地域において真に耕作されているのは「四分の一」未満であると主張する W. R. グレッグ

27 Ibid., p.112.

28 Ibid., p.113.

29 マルサスは『人口論』で「人口は生存資料をこえて増加するという〔…〕傾向を有する」と述べている。Thomas Robert Malthus, *An Essay on the Principle of Population* (Cambridge: Cambridge University Press, 1992), p.15.

30 マルサスによるこの文言を説明しつつ、賃金上昇のためには労働者の人口制限が必要であると主張するミルの議論を参照のこと。John Stuart Mill, *Principles of Political Economy, Collected Works of John Stuart Mill, Vol.II* (Toronto: Toronto University Press, 1965), pp.351-354.

31 Salt, *The Logic of Vegetarianism*, p.79.

の著作を引いて、地球の潜在的な食料生産力はきわめて大きいと示唆する<sup>32</sup>。それは明らかに、食料不足への恐怖を取り除くことによって、マルサスの呪縛を解体することを試みたものと言えよう。

このようにマルサス的な解釈を否定しながら、『菜食主義の論理』で示されるのが、菜食主義は農業・農村復興の万能策ではないものの、それをうながすという主張である。

まずソルトによると、菜食主義の採用は、土地の生産力を大幅に上昇させるものであった。上述したように地球の土地生産力は潜在的にきわめて大きい、その生産力の増大は、牧場を農地に転換することによって効果的に得られる。「羊肉」を作ろうとするより「小麦」を育てた方が、同一面積の土地で「少なくとも十倍の」人々を扶養しうる、というグレッグの主張をソルトは引く（強調は原文）<sup>34</sup>。土地生産力の増大は、外国への食料依存からの解放ももたらす。「海外からの食料輸入への依存」という「危険性」は「菜食主義の拡大に比例して少なくなるであろう」<sup>35</sup>。

さらに菜食主義による農業の復興は、都市から農村への人口移動も促すであろう。「菜食主義は、あの切実に求められていた「大地への帰還」*return to the land*を、何らかのかたちでもたらす傾向を有している」（強調は原文）。私たちは「一世代もたたないうちに」「人の移動が逆方向に進むのを——都会から田園に向かうのを——目撃するだろう」という、フランシス・ウィリアム・ニューマン（ジョン・ヘンリ・ニューマンの弟で菜食主義者としても知られる）の予測をソルトは肯定的に引用する<sup>36</sup>。農村から都市へ、そして海外へという現在の人口移動が、菜食主義の採用によって逆転しう

32 Ibid., pp.79-80.

33 「農業衰退」は「多様な理由」からなっており、菜食主義者は自らの提唱するシステムが達成しうることを過大に主張しないことが賢明である、という慎重な議論をソルトは組み立てていた。Ibid., p.80.

34 Ibid., p.80.

35 Ibid., p.81.

36 Ibid., p.80.

る、という主張である。菜食主義が「大地への帰還」をもたらすという展望、言い換えれば「菜食主義から帰農へ」という見通しが示されたのである。

ソルト自身がサリー州の田園地帯への居住を選択したことも併せて考えてみれば、ソルトの思想には、当初から、ある種の農村生活への志向性が含まれていたと考えられるかもしれない。<sup>37</sup>そして菜食主義に関する著作を通じてソルトは、さらに明確に、イギリスの農業および農村の現状への深刻な懸念や、マルサス的な食料不足理解への様々な批判、そして、菜食主義の採用こそが農業問題を解決する一助になるという展望をも示していったのである。

### 第三節 人道主義と「人道主義連盟」

しかしソルトの帰農論は、それと並行して彼が発展させていった人道主義 humanitarianism の理念と、またその理念を具現化した「人道主義連盟」の活動との間に、ある種の緊張や葛藤をはらんでいたように思われる。その緊張ないし葛藤については次節でより詳しく見るとして、本節ではまず、この人道主義理念と「人道主義連盟」の活動の内容を確認するところから始めよう。

人道主義とは無論、古くからある言葉であるが、ソルトはそこに独自の意味を加えている。ソルトは人道主義概念の歴史的展開を追った論文の中で、人道主義全般の意味は「人間的な諸原理——すなわち同情、愛情、優しさ、そして普遍的慈愛——の研究および実践」であると規定する。しかし「現代」における人道主義に関してはむしろ、以下の点を強調する。「人道主義の目的は、残虐な行為や不当な行為を犯すのを防ぐこと——すなわち、感覚

---

37 ソルトはこの転居を、ソローやカーペンターの著作に影響された「生活の簡素化」の実践として回顧している。Henry S. Salt, *Seventy Years among Savages* (London: George Allen and Unwin, 1921), pp.73-74. ただソルトによる「簡素な生活」論については本稿で踏み込む余裕がない。

ある存在すべての苦しみを、可能な限り、是正することである。<sup>38</sup>ここに見られる現代的な人道主義こそ、ソルトが強くその理解と普及を訴え続けたものであった。後述するように「人道主義連盟」の理念として掲げられたのも、この意味での人道主義——すなわちソルト独自の解釈がこめられたそれである。

ところでソルト的な人道主義のいま一つの大きな特質は、その苦しみを是正すべき対象が「感覚ある存在すべて」と表現されているところにあった。それは、対象を人間だけではなく、動物などほかの「感覚ある」生物すべてへと急進的に拡張することを意味していた。人間と他の生物を、「感覚ある存在」として同一線上に位置づけて、その意味では等しく、人道主義的救済の潜在的な対象としたのである。

以上の人道主義の実現を目的として1891年にソルトらによって結成されたのが「人道主義連盟」である。その設立目的や活動を「人道主義連盟」設立宣言」から確認しておこう。「設立宣言」によると、「連盟」は「自衛の場合、もしくは絶対的な必要性が正当に主張できる場合を別にすると、いかなる感覚ある存在に対しても、直接的にあるいは間接的に苦痛を与えることは不正である」という「人間性に関する明瞭で一貫した原則」に立脚して設立された。この原則のもとでは、「人間によって人間に対し加えられる残酷さ」だけではなく「人間より下等な動物への意図的な虐待」も抗議の対象となる。<sup>39</sup>前述したソルトの人道主義理念が色濃く流れこんでいるのが見てとれよう。

この原則に従って「人道主義連盟」はまず、現刑法の「改正とより公正な運用」、「侵略戦争」の未然防止、「弱者および無力な者」を保護する「公的義務」の主張など、人間の苦痛を是正する活動を進める。だがそれに加えて、「生体解剖」や、「スポーツ、ファッション、利潤ないし専門職の発展」

38 H. S. Salt, "Humanitarianism," *Westminster Review*, 132 (July 1889), pp.74-91, pp.74, 82.

39 "Manifesto of the Humanitarian League," Humanitarian League, *Fifth Annual Report*, 1896, n. pag.

のために「苦痛を〔動物に〕与えること」など、人間以外の「感覚ある存在」に苦痛を与えることの防止にも、「連盟」は取り組む。また、その一部として、「畜牛の輸送と解体施設」において「動物が被る著しい苦痛の防止」も、「連盟」の活動の対象として「宣言」にあげられていた（詳しくは次節で述べる<sup>40</sup>）。

このように当初から多様な活動内容を含んでいたため、まもなく同連盟は内部に「刑法および監獄」、「子どものためのレクチャー」、「スポーツ」などの部門を設立することになる。それぞれが精力的なキャンペーンを展開したことも「人道主義連盟」の活動活性化につながったが<sup>41</sup>、本稿の叙述との関係でとくに重要なのは、次節で述べるように、1896年における「人道的な食部門」Humane Diet Departmentの設立であった。

ところで以上のようにソルトが発展させた人道主義であるが、その基本的な理念は、「感覚ある存在すべての苦痛を〔…〕是正すること」にあった。ここで注意しておきたいのは、この基本的な理念それ自体には、特段の農村志向は含まれていないと思われることである。また実際、その理念の実現を求める「人道主義連盟」の具体的な活動は、そのほとんどが、都市住民が都市に居住したまま、参加し、推進することが問題なく可能であった。たとえば生体解剖の反対、人々の衣服における羽毛の使用の禁止、パブリック・スクールにおける体罰の禁止などは、いずれも——農村居住者を排除しているわけではないが——都市生活者が何の問題もなく積極的にコミットしうる運動であった。人道主義は、都市生活者に開かれた思想であった。

したがって人道主義という理念、そしてそれにもとづく「人道主義連盟」は、ソルト自身の嫡子であったにもかかわらず、ソルト自身の農村志向と実は鋭い緊張関係をはらんでいたと言わざるを得ない。以下節を改めて、ソルトの帰農論が人道主義と——また「人道主義連盟」内の動向と——どのよう

---

40 Ibid.

41 Weinbren, "Against All Cruelty," pp.91-92.

な葛藤を示していったのかを具体的に確認してゆこう。

#### 第四節 帰農論への制約

本節ではまず、ソルト自身、自らの人道主義の理念によって、帰農論に一定の制約を加えていたことを確認する。そして次に「人道主義連盟」の内部における動向と、ソルトの帰農論とのあいだに一種の緊張関係があったことを——すなわちソルトの帰農論にはその意味での外的制約もあったことを——示そう。

まず人道主義理念とソルトの帰農論との関係から説明しよう。帰農論を発表した『菜食主義の論理』が刊行されたのは、すでにソルトが人道主義の理念をかかげ、「人道主義連盟」の活動を発展させたのちのことである。したがって『菜食主義の論理』における帰農論には、実は、人道主義の見地から、帰農論への一定の留保がつけられていた。すなわちソルトによると、そもそも菜食主義を進めるべき動機の中で主要なものは「人道と健康という動機」である。それに比べれば「経済的観点」は副次的なものにすぎない。そしてソルトは、この経済的な理由の中に、帰農がもたらす農業と農村の復興を入れていたのである。したがって人間の健康に対する好影響を別にすれば、菜食主義は、何よりもまずそれが「人道」上の理由から——具体的には動物たちの苦痛の軽減ないし解消をもたらすがゆえに——進められるべきであった。帰農による利益が見込めることは、それに比べると、あくまでも副次的な動機となるにすぎない。ソルト自らが、人道主義という上位の理念に従って、帰農論の無条件の展開には歯止めをかけていたのである。

無論、「人道」上の利益に比べれば従的なものだったとはいえ、帰農がもたらす様々なメリットがソルトの目から見て大きなものであったことには変わりない。人々が菜食主義を採用することによって多くの人が農村に戻り、羊を太らせる代わりに小麦を栽培し、イギリスの食料不足を解消するととも

42 Salt, *The Logic of Vegetarianism*, pp.77, 77-82.

に食料自給率を上げるのは、ソルトにとっては明らかに魅力的な将来社会のありかたであった。「大地への帰還」は十分に、思い描いて提唱すべき、未来のイギリスの姿だったのである。

しかしこの「菜食主義から帰農へ」というソルトの展望は、「人道主義連盟」の内部における動向から、ある意味ではすでに厳しい挑戦を受けていたと思われる。というのも、「人道主義連盟」の内部ではすでに、非菜食主義者たちを取り込んだ食改革の運動が展開されており、それは農村志向からも実質的に大きな隔たりを有していたからである。このことを以下、連盟内部における「人道的な食部門」の設立経緯から論じてゆこう。

同部門の設立は、そもそも、ソルト自身の柔軟な姿勢を背景とするものであった。ソルトは菜食主義が一般社会に受け入れられる際の困難をよく認識しており、菜食主義への社会的な歩みは漸進的なものになると論じていた。たとえば、ソルトによれば、菜食主義者は、「一足飛びに千年王国を達成しようとする欲望」を持ってはいない。菜食主義者が当面目指しているのは、「現在の血生臭い食のシステムを可能な限り人間化しようとする、現実的で、誰でも理解できる、必然的に不完全にならざるをえない試み」<sup>43</sup>なのである。

このソルトの姿勢も背景にして1896年に設立されたのが、「人道主義連盟」<sup>44</sup>における「人道的な食部門」である。同部門の設立宣言によれば、「食事のための殺戮に伴う多くの残虐な行為は、厳密な菜食主義的な調理法に忠実に従うとはまだ宣言できない人びとも感じ取り、非難している。」この状況に鑑み「菜食主義者であろうとなかろうと人間的な精神を有する人々を結束させ」て活動させるのが同部門の狙いであった。そこで同部門は、「どの種類の食事が、その準備段階において、より多くの苦痛をはらみ、あるいはより少ない苦痛をはらんでいるか」を指摘することにより、「私たちの食のシス

43 Salt, *The Logic of Vegetarianism*, p.110.

44 翌年に衣料改革活動を統合し「人道的な食と衣料部門」Humane Diet and Dress Departmentへと改名されるが(Humanitarian League, *Seventh Annual Report*, 1898, pp.15-16.)、本稿では煩雑にならないよう、「人道的な食部門」に名称を統一する。

テムを人間化する」ことを提案したのである<sup>45</sup>。この宣言のもと同部門は、前述の「人道主義連盟」設立宣言」でも述べられていた「畜牛の輸送と解体施設」における苦痛の軽減を求める活動に主として乗り出してゆく。

ソルトの見地からすれば、このような「人道的な食」の模索は、あくまでも、肉食主義の社会的な採用という最終的な目的を達成するまでの一時的な活動と位置づけられていた。なるほどソルトは、同部門の初代執行委員会にも名を連ね、同部門の活動も支えている<sup>46</sup>。しかしソルトは同部門の設立と同年に『フォートナイトリ・レビュー』に発表した論文において、このように論じていた。肉食主義者は畜殺方法の改善に反対するものではない。しかし仮に「秩序ある、ロンドン州議会が運営する食肉処理場」が登場しても、それは「単なる方法の改善」にとどまる。むしろ肉食主義者は「はるかに完全な解決」を求めるべきである<sup>47</sup>。「人道的な食」の模索によって真の目的が忘れられてはならない、とソルトは釘を刺していたのである。すなわち肉食主義の採用が最終的な、必ず目指されるべき目標であるという主張においてソルトは一貫していた。「帰農」の展望も、その一貫した主張の上に築かれていたのである。

だが「人道的な食部門」の内部では、ソルトが育んでゆくこの展望と大いに齟齬をきたすことになる姿勢や議論もまた生まれていたのである。

第一に、「人道的な食部門」は、前述の設立経緯でも示唆したように、肉食主義それ自体の追求とは一線を画す姿勢を示していた。同部門の設立宣言は、肉食主義の採用こそが問題の「完全で最終的な解決」をもたらすとひとまず述べる。しかし同宣言は続けて、「人道主義連盟」は人びとが「各自が自由に考え、自分が好きなように行動する」のも同様に容認しており、「人

---

45 Humanitarian League, *Humane Diet: Manifesto of the Humanitarian League Sub-Committee* (London: Humanitarian League, n.d.), p.1.

46 Humanitarian League, *Sixth Annual Report*, 1897, p.11.

47 Henry S. Salt, "Humanities of Diet," *Fortnightly Review*, 66 (o.s.), 60 (n.s.), (Sep.1896), pp.426-435, p.430.

道主義連盟」は組織としてはいかなる肉食主義的なプログラムにもコミットしていない」とも述べている。<sup>48</sup> 同部門の設立経緯を考えれば当然のこととはいえ、肉食主義の推進は、同部門の——さらには「人道主義連盟」の——正式な活動目標ではないことを慎重な口ぶりながら確認したと言えよう。

第二に、「人道的な食部門」は、都市生活を明らかに前提とした改革運動を精力的に進めて行った。最も積極的に——また長期的に——同部門が取り組んだのは、食肉、しかも都市生活における食肉を前提とした活動——すなわちロンドンの食肉処理場における畜殺過程の「人道化」であった。すでに「人道主義連盟」の「設立宣言」にも明確に出ていたように、食肉用家畜の輸送と解体処理に伴う苦痛の軽減は、同連盟の初期からの関心事であった。とくに「人道的な食部門」も足場にして組織的な取り組みがなされたのが、ほかならぬ首都ロンドンにおける民間の食肉処理場における畜殺過程を「改善」することであった。<sup>49</sup> 農村生活を展望するどころか、現在の都市生活を前提にしていたのが、同部門の主要な取り組みだったのである。

加えて言えば、「人道主義連盟」関連の著作物では、さらに一步進んで、食用肉の広域的な生産・流通体制の技術的近代化を促進すべきだという議論さえ生まれていた。前述したように、「人道主義連盟」は長距離輸送される家畜の苦痛軽減に多大な関心を寄せていた。その方法を検討した論考で注目すべきなのは、「人道主義連盟」が編纂した論集に発表された「畜牛輸送船とわが国の食肉供給」と題されたものである。この中で著者らはアイルランドとブリテン島などにおける畜牛貿易を検討し、それがもたらす苦痛の増大を解決するために「人道主義者たちが相対的に奨励しうるのは」「死んだ肉の交易」——すなわち「冷凍肉とチルド肉」の交易——である、という結論に達する。<sup>50</sup> 「相対的に」という表現に、本来は肉食の廃止が望ましいと

48 Humanitarian League, *Humane Diet*, p.1.

49 Hendrick, *Henry Salt*, pp.71-72.

50 Isabella M. Greg and S. H. Towers, "Cattle Ships and Our Meat Supply," in *Cruelties of Civilization*, 2nd series (London, 1896), chap.v, pp.26-29. 著者らが「人道的な食部門」

いう著者らの葛藤も読み取れるかもしれない。しかし著者らの提言は、事実上は、発展しつつあった食肉の巨大な国際分業と流通のシステムを追認するものであったと言っても、あながち不当ではあるまい。

したがってソルトが「菜食主義から帰農へ」という見通しを発表したころには、すでに、「人道主義連盟」の中で、そのような展望をなし崩しにしかねない議論や活動が台頭していたのである。「人道的な食部門」を中心に広がりつつあったのは、菜食主義と農村生活と自給自足ではなく、肉食と都市生活と国際分業を前提とした改革運動であった。「菜食主義から帰農へ」というソルトの見通しは、ソルト自身の組織の中で、当初から深刻な揺さぶりをかけられていたのである。その意味での外的制約を、彼の帰農論は最初からはらんでいたと言えよう。

もっとも、ソルトの帰農論が足元から揺さぶられていったのは、ある意味ではソルトの提唱する人道主義の必然的な結果だったと言えるかもしれない。前節で論じたように、ソルト的な人道主義の概念それ自体には、農村生活の推進を特段に押し進める要素は見当たらなかった。それは都市生活の継続ないし推進とも容易に同居、ときには連携しうる概念であった。「大地への帰還」というソルトの展望は、ある意味では、彼自身が推し進めた人道主義の発展によって制約されてもいたのである。

## 結びにかえて

本稿では限られた資料と角度からであるが、ヘンリ・ソルトの農村志向について若干の検討を加えてきた。

以上で確認してきたように、ソルトは『菜食主義の訴え』や『菜食主義の論理』を通じて、明確に、農業・農村問題への関心を示していた。それだけではなく、当時なお流通していた、マルサスの人口理論にもとづく貧困や食料問題の説明や解決策に対して反論を試みた上で、菜食主義の採用は、都市

に参加していたか否かは確認できていない。

から農村への人口還流と、食料生産の増大と、食料自給の達成に貢献するであろうと指摘していたのである。「農場コロニー」などの実践面に対するソルトの関与の程度はなお不明だが、菜食主義の社会的受容による「大地への帰還」は望ましくまた可能であるという議論を彼はたしかに用意していた。この意味での「菜食主義から帰農へ」という展望が、ソルトの農村志向の一つの表れだったのである。新しい農村社会へのソルトなりの見通しを確かに彼は有していたとも言えよう。

しかしその一方で、菜食主義こそが「大地への帰還」に貢献すると主張するソルトの展望には、様々な制約がかけられていたことも無視できない。

本稿で論じてきたように、1890年代にソルトが展開した人道主義思想は、農村生活の推進を特段に狙いとするものではなく、このことがソルトの展望にある種の制約をかけることになった。まずソルト自身、菜食主義を進める最大の動機は人道主義にもとづくものであって、「帰農」がもたらす様々な利益は、むしろ二次的、副次的な動機に数えられるにすぎない、という姿勢を明確にしていた。ソルト自身の思想においても、「菜食主義から帰農へ」という見通しは、無条件に積極的に打ち出されていたわけではなかった。その展望には、ソルト自身の思想的確信にもとづく——その意味で内的な——制約が慎重にかけられていた。

さらにそれだけではなく、ソルトの人道主義思想を推進する組織「人道主義連盟」の内部では、現在の都市生活の継続を前提にした「人道主義運動」——とくに「人道的な」肉食を進める運動——が発展し、「菜食主義から帰農へ」というソルトの展望を足元から揺さぶっていたのである。この意味でソルトの「菜食主義から帰農へ」という展望には、外的な制約が当初から加えられていたと言ってよいであろう。「大地への帰還」という夢は、ソルト自身の人道主義の思想だけではなく、その実践面の組織的發展によっても、足かせを受けていたのである。ソルトにおける農村志向と人道主義は、無視できない緊張関係をはらんでいたと言えよう。

ただ本稿では分析対象の限定や資料上の制約のため、ソルトの議論それ自体についても、検討が不十分な点が多々残されている。たとえばソルトの帰農論の形成過程は、1880年代から1890年代のイギリスにおける農業・農村論の展開の文脈の中で、さらにソルト側の資料もより豊富にした上で吟味されなければならないであろう。また、ソルトの農村志向をソルト全体の思想的な発展の中で捉えるためには、少なくとも、ソローへの傾倒と不可分である彼の「簡素な生活」論を併せて検討しなければなるまい。これらの検討を踏まえた上で、当時のイギリスにおける農村志向や、さらには環境保護主義の歴史的発展を再考するのは別稿の課題としたい。